

今週の美学「精髓」

岡倉天心（1862～1913）は1877年（明治10年）に開設された東京大学の一期生で、フェノロサのもとで学んだ。日本ではじめてヘーゲルなどのドイツ哲学を講義したフェノロサによって、日本の哲学の歴史の原点となり、井上哲次郎や三宅雪嶺など、多くの哲学者が彼のもとから育っていった。

しかしフェノロサは次第に日本の古美術に関心をよせていき、のちに東京美術学校に移り、古美術の研究や調査に傾注していく事になり、その手助けをしたのが岡倉天心であった。彼自身もやがて日本美術に開眼していくことになる。天心は開校一年後に東京美術学校の校長となり、若き画家たちの育成に尽力する。明治36年の講演に「古来東西の美術家は、彼の宗教家の如く、又文学者の如くに、自ら文明の先駆となりて一世を導くが故に尊重せられたり。然る当世の絵画家に至りては、此の覚悟なく、又た此修養なし。其世人に輕蔑せらるるも亦た当然ならずや」また「凡そ美術家として尊重すべき所以は、世の先覚となりて美の門鎖を開き、人生を慰藉して之を高尚に導くのが天命あるが故のみ、其凡庸の職人たるに至りては、何等の点にか特殊の尊敬を払うべき」と言った。ここでは、人々を「高尚に導く」という点に芸術の意義があると述べている。

もう一方で芸術作品は、その感覚的効果によって、人々の心深く浸透し、感性を高揚させる役割を担っていた。そして理想とつねに結びついていたものとは別に遊びと結びついたもの、あるがまま、自然という点にその特徴があるという芸術観もある。フロイトは、満たされない願望こそ想像力の源泉であると語っている。

哲学者西田幾多郎は「芸術的創作の目的は何処までも非実在的たる我々の主観的想像の所産に過ぎないと考えられる。・・・そこに何等の道徳的善悪の批判はない、悪なるものも芸術の対象として美となることが出来る。・・・美において我々は自由である。芸術は遂に遊戯的気分を脱し得ないのである」この主張に、「悪」をも美とすることによって、つまり「遊戯的気分」によってこそ、芸術は既成の秩序、既成の善悪の秩序を転換し、それを芸術固有の秩序へと転換する事ができる。このような秩序の転換にこそ芸術の意義があると言える。

「職工人」を尊敬に値しないと説いた岡倉天心に対して、生活の中にある工芸作品の中にも美を見いだすことができると主張した柳宗悦（1889～1961）は、名も無い職人たちが作り出した民芸品の美を再評価して「民芸運動」を起こした人である。美術の歴史において卓越したもの、非凡な個性をもって「美」の新しい側面を切り開いた天才と言われるレオナルド・ダ・ヴィンチやピカノを否定しようとしたのではなく、柳宗悦は、そのような偉大な美ではなく、本当の意味で人間を幸福にする生活のなかに現れる「尋常の美」工芸品のなかにも美はあると主張した。柳は「上手（じょうて）」な品と「下手（げて）」な品という区別に触れ、「上手物」は貴族などの富裕な人々が使った品、蒔絵や螺鈿などの技工を凝らした品に対して、「下手物」は一般庶民が日々の暮らしのなかで使うもの、いわゆる民芸品、工芸品のなかに「無駄をはぶいた簡素、作為に傷つかない自然さ」美は用を離れたところに生まれるのではなく、むしろ用のただ中にあることを柳は主張し「用ゆべき場所で、用ゆべき時に用いば、自ずから法に帰ってゆく。一番無駄のない用い方に落ち着く時、それが一定の型に入るのである。型はいわば用い方の結晶した姿ともいえる。煮つまった時、ものの精髓に達するのである。それが型であり道である」それはものごとのもっとも核心にあるものである。